（二〇一七年度）

3 国語問題（六〇分）

（この問題冊子は20ページ、三問である。）

受験についての注意

一、試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
二、試験開始前に、試験監督者から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
三、試験監督者から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
四、筆記具は、**HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシル**に限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能やスマートウォッチなどのウェアラブル端末を使用してはならない。
五、**解答は、解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。**
六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。また、マーク箇所以外の部分には何も書いてはならない。
七、訂正する場合は、消しゴムでていねいに消すこと。**消しくずはきれいに取り除くこと。**
八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
九、試験監督者の許可なく試験時間中に退場してはならない。
十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

一

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

石川淳と坂口安吾とを同列にならべて、たとえば新戯作派だとか無頼派だとかいったレッテルを貼りつけるやり方は、すでに戦後も三十年を経過した今日、まったく無意味になってしまったと私には思われる。現在の石川淳には、どこにも無頼派らしいところは見られない。いや、織田作之助も太宰治も坂口安吾もすでになく、社会の経済的基盤が完全に変質してしまった現在、無頼派などというものは日本文壇に存在しえなくなったのだ。そして存在しえない過去の名称を、げんに生きて仕事をしている作家に貼りつけることの不当は、[1]いうを俟たぬであろう。

なるほど、坂口安吾はまだ戦後の狂瀾怒濤の完全には終っていない時期に、文学的にも生活的にも捨身の破滅的な行動を演じて、あわただしく死んでいった。安吾は最後まで、外部から人間の行動を規制してくる、あらゆる文化的な価値としての形式の支配に対して、果敢な捨身の抵抗を示したように思われる。一言をもってすれば、彼はあらゆる形式の破壊に一生を賭け、ついにその文学も中途半端のまま、その生活さえも破壊してしまったような趣きがあった。

しかし石川淳の生き方はちがっていた。より巧智であったといってもよい。文学的にも生活的にも、淳は安吾と同じ基盤に立ちながら、なおかつ生きのびるための方法を模索したのである。ここで私が用いた[2]「生きのびる」という表現は、もちろん一つの比喩である。そういえば、安吾はもっとも有効な修辞学上の武器であるべき、この比喩というものにも徹底的に無縁であった。安吾のいわゆる説話(福田恆存の表現)には、石川淳の短篇におけるような、形而上学に向ってひらかれるべき視覚が欠けていた。

私には、坂口安吾が[3]孜々としてあらゆる形式をぶちこわすのに対して、石川淳がひたすら方法を模索するといったような意味で、この二人の昭和十年代に出発した作家の関係を、ダダイスムとシュルレアリスムの関係として捉えてみたいような気がしないでもない。本人が実際に影響を受けたかどうかはともかくとして、安吾の初期作品『木枯の酒倉から』や『風博士』には、たしかに日本的なダダの味わいがあるし、淳の『山桜』から戦後風俗を素材とした数々の幻想的短篇、あるいは『鷹』から『虹』に

いたる中篇には、明らかに超現実主義風の味わいが読みとれるであろう。しかし、私が強調したいのは必ずしもそのことではない。むしろ私は、生き方や倫理の問題に重点を置いて言っているのである。周知のように、フランス本国のダダやシュルレアリスムも、単に美学上の変革ではなく、より大きく生き方に係わるところのものであった。

「反芸術といふことも、作品を事件と見ることも、ことばはいろいろだらうが、今はじまつたことではなかつた。近いためしに、第一次大戦のあとにダダがおこつてゐる。今さらダダの説明でもあるまい。当時わたしはまだ年少、仕事にもなんにも、芸術の現場から遠いところにふらふらしてゐたが、しかしピカビヤは気に入らないものではなかつた。わたしは精神……とまではいはない、青二才の生活感情に於ていくぶんはダダのはうに傾斜しかかつたやうなおぼえがある。」

右は石川淳の興味ぶかい回想(『夷齋遊戯』より)である。この言葉につづけて、「それでも、ダダの波のあとに置きざりをくつた貝殻の一かけらになつたやうなおぼえはない」と淳はつけ加えている。これは私流の言葉に翻訳すれば、[4]気楽な形式からの逸脱に安住せず、観念と形式のスリリングな追いかけっこ、つまりは絶えざる方法の模索によって、ダダの波を乗り切ったということを意味する。観念のみが突っ走り、やみくもに形式をぶちこわそうとする安吾にくらべて、淳がより巧智であったと私が前に書いたのも、この意味にほかならない。

名高い『日本文化私観』における断定によれば、[5]「必要性がすべてに優先する」という一種の実用主義哲学を堅持していた安吾にとって、その散文は、どうしても無定形のなかに突入してゆくほかはなかった。安吾は散文から一切の形式をはぎとり、その純粋な内容を提示することができると考えた。

ところで、石川淳によれば、[6]文章の内容とは「そこに持続された精神の努力の量であり、形式とはその努力の言葉に於ける作用」(『文學大概』)である。淳においては、内容と形式はいつもスリリングな追いかけっこをしているのである。コミュニズムにおいてさえ、形式を離れた思想の純粋な内容などというものは、彼にとってはありえなかったのである。

しかし安吾の独特な合理主義あるいは実用主義の弱点をあげつらうのは、むしろ容易であろう。[A]小林秀雄との対談で、小林が持ち出した「規矩」という概念を、ほとんど理解することができなかったか、あるいは理解することを頑強に拒否していたの

が安吾という度しがたい人間であった。[7]それでも、安吾の論理がいかに支離滅裂であっても、その一途な願望が、必ずしも私たちに感得できないものではないかぎり、その文学は生きているといっても差支えないのである。『白痴』や『紫大納言』や『夜長姫と耳男』などは、彼の評論における浅薄な形式否定の論理を裏切って、石川淳の表現によれば「部分と全体とをくるめて」光り輝いているのだ。

ここで私が思い出さざるをえないのは、おそらく戦後三十年間に輩出したわが国の批評家のなかで、石川淳および坂口安吾に対するもっとも良き理解者であり、同時に、その仕事の性質が彼ら二先輩のそれを正統に引き継ぐものと思われる、花田清輝の例によって例のごとき卓抜な評言である。

花田は「スカラベ・サクレ」というエッセーのなかで、林達夫の「異常な好意と尽力」(著者の後記)によって出版されたという中橋一夫の名著『道化の宿命』に拠りながら、「荷風・淳・安吾の系列は、わたしに、シェークスピアの芝居に登場する道化の三つの型――辛辣な道化、悪賢い道化、愚鈍な道化を連想させる」と述べ、荷風を辛辣な道化に、淳を悪賢い道化に、そして安吾を愚鈍な道化に、それぞれ当てはめているのである。しかも花田は、[8]一般に見られる道化の進化のコースを逆転させて、「たとえば、荷風の『花火』におけるおもわせぶりなプロテストが、淳の『曾呂利咄』における手のこんだ諷刺に変り、最後に安吾の滑稽小説のたぐいにおける痴呆的な笑いと化した、とみればみれないこともないではないか」という、彼一流の弁証法的な、目のさめるような逆説を吐いているのだ。

[9]このエッセーにおける花田清輝のねらいは、いうまでもなく、愚鈍な道化たる坂口安吾の名誉回復である。私は前に、安吾と淳との関係を、ダダからシュルレアリスムへの進化のコースによって捉えたが、花田流の弁証法にしたがえば、むろん、このコースも逆転され、どちらかといえばダダの真価が強調されることになるにちがいない。それはそれで一向に差支えないし、私としても、べつだん、淳と安吾の進化における優劣を論じるというがごとき、愚かしい意図は最初からなかったのだということを強調しておかねばならぬ。花田の意図も、おそらく私と同様であろう。

悪賢い道化たることを自覚している石川淳は、次のように書いている。

「どうも日本の芸術家諸君はのべつにマッチをすつて思想のたばこを燃してゐるくせに、自分が信じてゐるわけでもなささうな『永遠の秩序』には、たつた一本のマッチをすら惜しんで、火をつけてこれを燃さうとしないほどケチンボで無精のやうに見える。たぶんオトナといふものだらう。」

この点から見るならば、坂口安吾は明らかにコドモだったということができよう。安吾は火遊びの好きなコドモのように、マッチを惜しまず「永遠の秩序」を燃そうと躍起になっていた。その論理は支離滅裂、とても「思想のたばこ」を燃しているとはいえず、たしかに愚鈍な道化と呼ばれるにふさわしかった。[10]しかし安吾の魅力は、繰り返していうならば、このコドモ性にこそあるのである。

（澁澤龍彦「石川淳と坂口安吾　あるいは道化の宿命について」）

〈注〉ダダイスム…既成の価値観を否定し、芸術の自由な表現を目指した芸術運動。
シュルレアリスム…非合理な潜在意識を表現することで、人間の全的解放を目指した芸術運動。超現実主義。
ピカビヤ…フランスの画家（一八七九～一九五三）。ダダの運動に参加した。

問一　傍線部1はどういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　言うのにためらいを覚えるであろう。
b　言う必要はないであろう。
c　時代錯誤と言うべきであろう。
d　見当はずれであろう。

問二　傍線部2について、「一つの比喩」とはどういうことの比喩か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　文化的な価値としての形式の支配を打破し、自らの観念を伸長させること。

b　戦後の狂瀾怒濤に命がけの抵抗をし、時代を突き抜けた倫理を打ち立てること。

c　文学的にも生活の上でも巧智にふるまい、時代に左右されない文学を形成すること。

d　小説における観念と形式の関係について模索し、ダダイスムを乗りこえること。

問三　傍線部3について、この表現の特性を説明したものとして、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　「孜々」と「ぶちこわす」という同じ方向性をもつ言葉の使用によって、破壊行為が強化された表現となっている。

b　「ぶちこわす」という言葉に「孜々」という言葉を加えることによって、「こわす」行為に怒りが込められていることを示す表現となっている。

c　「孜々」と「ぶちこわす」という相反するイメージの言葉を使用することによって、ユーモラスな表現となっている。

d　「ぶちこわす」という言葉に「孜々」という言葉を配置することによって、「こわす」行為が本心から出ているものではないニュアンスを帯びた表現となっている。

問四　傍線部4「気楽な形式からの逸脱」とは何を指しているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　美学上の変革

b　実用主義哲学

c　ダダイスム

d　シュルレアリスム

問五　傍線部5について、安吾が「どうしても無定形のなかに突入してゆくほかはなかった」のはなぜか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　安吾にとって必要なのは内容であり、その内容は形式をもたない無定形のものであるから。

b　安吾が重視する必要性は具体的なものであるので、それを表現するには無定形という形式を要求するから。

c　安吾は純粋な内容を表現するのには無定形がよいと考え、形式の価値を軽視したから。

d　安吾にとって形式は抽象的なものであり、持続的な精神を提示するのには適合しなかったから。

問六　傍線部6はどのようなことを言っているのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　文章の内容は形式とのスリリングなせめぎ合いで形成されるものであり、内容と形式は互いに補い合っていること。

b　作者の精神の持続の量と文章の内容の質は比例しており、それが形式の優劣を決定すること。

c　文章の内容は作者が精神の努力をしないかぎり形成されず、形式は作品の形成には有効な力とはなりえないこと。

d　作者の精神の努力の量は文章の内容と等価であり、その努力が言葉に外化して形式が生まれること。

問七　傍線部7について、筆者が安吾を「度しがたい人間であった」と言うのはなぜか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　小林秀雄の「規矩」という概念と無関係の世界にいると思ったから。

b　実用主義を通すために小林秀雄の「規矩」という概念を排除したと思ったから。

c　小林秀雄の「規矩」という概念に対して理解を示さなかったと思ったから。

d　論理が支離滅裂であって小林秀雄の「規矩」という概念に反論することができなかったと思ったから。

問八　傍線部8について、筆者の言う「一般に見られる道化の進化のコース」の説明としてもっとも適切なものを、次の中から一つ選べ。

a　まず愚鈍な道化が起こり、それがその後悪賢い道化と辛辣な道化とに分化する。
b　まず愚鈍な道化が起こり、次に悪賢い道化、さらに辛辣な道化が起こる。
c　まず辛辣な道化が起こり、それがその後悪賢い道化と愚鈍な道化とに分化する。
d　まず辛辣な道化が起こり、次に悪賢い道化、さらに愚鈍な道化が起こる。

問九　傍線部9について、「坂口安吾の名誉回復」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　素朴な笑いとされる「痴呆的な笑い」をもつ安吾の小説こそが、道化の雄であるということ。
b　「痴呆的な笑い」をもつ安吾の小説だけが、ダダイスムの真価を示しているということ。
c　安吾の小説がもつ「痴呆的な笑い」は、低級のように見えてその実もっとも高級であるということ。
d　安吾の小説がもつ「痴呆的な笑い」には、辛辣な道化と悪賢い道化の弁証法的止揚が見られるということ。

問十　傍線部10について、筆者の言う「コドモ性」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　火遊びの気分で実用主義をからかうこと。
b　愚鈍な道化を遂行しながら内心は真剣であること。
c　支離滅裂な論理で思想を構築しようとすること。
d　懸命に強固な文化的規範を壊そうとすること。

問十一　二重傍線部A「小林秀雄」の著作を、次の中から一つ選べ。

a　風俗小説論　b　堕落論　c　敗北の文学　d　芸術と実生活　e　様々なる意匠

問十二　二重傍線部B「荷風」が中心となって創刊した文芸雑誌を、次の中から一つ選べ。

a　文学界　b　三田文学　c　スバル　d　新思潮　e　白樺

二

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

「皇后宮(X)、上東門院(Y)、いづれか今少しめでたくおはしましける」と言へば、「皇后宮、御みめもうつくしうおはしましけるとこそ。院も、いと御志深くおはしましける。失せさせ給ふとて、

A 知る人もなき別れ路に今はとて心細くも思ひ立つかな

B 夜もすがら契りしことを忘れずは恋ひむ涙の色ぞゆかしき

など詠ませ給ふらむこそ、あはれに侍れ。のちに御覧じけむ帝の御心地、まことにいかばかりかはあはれにおぼしめされけむ。

さて御わざ[1]の夜、雪の降りければ、

C 野辺までに心ひとつは通へども我がみゆきとは知らずやあるらむ

と詠ませ給へりけむも、いとこそめでたけれ。おはしまさぬ後まで、さばかりの御身に、御目[2]も合はずおぼしめし明かしけむほどなども、返す返すもめでたし。

また中関白殿隠れさせ給ひ、また内大臣流されなどして、御世の中衰へさせ給ひてのち、かすかに心細くておはしましけるに、頭中将それがし参りて、簾のそば、風に吹き上げたるより見給ひければ、いたく若き女房の清げなる、七八人ばかり、色々の単襲、裳、唐衣などもあざやかにてさぶらひけるも、いと思はずに、今は何ばかりをかしきこともあらじと思ひあなづりけるも[3]、あさましくおぼえけるに、庭草は青く茂りわたりて侍りければ[4]、『などかくは。これをこそ払はせておはしまさめ』と聞こえ給ひても、宰相の君となむ聞こえける人、『露置かせて御覧ぜむとて』といらへけむこそは、なほ古りがたくいみじくおぼえさせ給へ。

上東門院の御事は、よし悪しなど聞こゆべきにもあらず。何事もめでたきためしにはまづ引かれさせ給ふ時なれば、とかく申すに及ばず。何事も御幸ひ極めさせ給ふあまりに、御命さへこちたくて、あまたの帝におくれさせ給ふこそ、口惜しく侍[5]れ。そのたびに、いとあはれなる御歌ども詠ませ給ひたるは、やさしくこそ侍れ。

一条院隠れさせ給ひて、

逢ふことも今はなき寝の夢ならでいつかは君をまたは見るべき

など詠ませ給へるも、いとめでたくこそ侍れ。

また、顕基の中納言の御返事に『世は二度はそむかざらまし』など侍るも、いとあはれなり。

何事よりも、優なる人多くさぶらひけむこそ、いとど心にくくめでたくおぼえ侍れ」と言へば、「その御妹の枇杷殿の皇太后宮と聞こえさするにこそ、いと華やかに物好みしたる人々多くさぶらひけれ。大和宣旨も、その宮の女房なるべし。折々の女房の装束、打出なども、ためしなきほどに制を破り、女房の一品経供養などしけることも、いとおびたたしく侍りけれ。

女院には、さばかり名を残したる人々さぶらひけれど、さやうのことなども、人の目驚くばかりはあらじ、とつつませ給ひけむほど、さまざま心の色々見えて、めでたくこそ侍れ。」

（『無名草子』）

〈注〉○皇后宮…藤原道隆の娘、定子のこと。一条天皇皇后。　○上東門院…藤原道長の娘、彰子のこと。女院も同じ。一条天皇中宮。　○院…一条天皇のこと。一条院も同じ。　○帝の御心地…帝は一条天皇のこと。　○中関白殿…藤原道隆。　○内大臣…藤原伊周。定子の兄。　○宰相の君…定子に仕える侍女。　○『世は二度はそむかざらまし』…源顕基の歌に対する彰子の返歌「ときの間も恋しきことの慰まば世は二度も背かざらまし」を指す。　○その御妹の枇杷殿の皇太后宮…藤原道長の次女で彰子の妹、妍子。三条天皇中宮。　○打出…牛車や建物の簾の下から、衣の一部をわざと出すこと。出し衣。　○一品経供養…『法華経』を一品ずつ各人が書写し、供養すること。

問一　和歌A・Bの作者は誰か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　定子
b　彰子
c　一条天皇
d　『無名草子』の作者

問二　傍線部1「わざ」とはどういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　出家
b　退出
c　葬送
d　門出

問三　和歌Cの説明として正しいものを次の中から一つ選べ。

a　定子を思って一条天皇が野辺を訪れたことは、きっと誰も知らないだろうという意味の歌である。
b　自ら訪れることは出来なくても、その心だけはついて行っていることを詠んだ一条天皇の歌である。
c　雪が降っているのを、これは一条天皇が訪れてくれたのだと思って、なつかしんでいる定子の歌である。
d　定子の思いが雪となって一条天皇のもとに降りそそぐのを人々に知ってほしいという意味の歌である。

問四　傍線部2「御目も合はず」とはどういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　相手を御覧になることもできず

b　正気を失われて

c　お眠りにもなれず

d　涙があふれなさって

問五　傍線部3「思ひあなづりける」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　「頭中将それがし」は、定子が、身内を失って悲しみに沈んでいるはずの時であるのに、若い女房たちを集めてきらびやかに暮らしているのを軽蔑していた。

b　「頭中将それがし」は、時勢が変わってしまったので、定子の所を訪ねても、何も興味深い話を聞くことはできないだろうと、軽く見ていた。

c　「頭中将それがし」は、頼りとする父や兄を失ってしまった定子のもとには、心もとない若い女房しかいないだろうとあなどっていた。

d　「頭中将それがし」は、定子の暮らしを、一家の勢力がすっかり衰えたので、何も優雅なことはないだろうと見下していた。

問六　傍線部4「庭草は青く茂りわたりて侍りければ」とあるが、定子側はなぜそのようにしていたと言うのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　悲しみの余り、草が生い茂っていることに気付かなかったから。

b　悲しみの涙を流すよすがとして、草の茂る庭を眺めていたいと思ったから。

c　わざわざ草に露を置かせて鑑賞しようとしていたから。

d　心細い生活で、草を刈ってくれる人がいなかったから。

問七　傍線部5「口惜しく侍れ」とあるが、なぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　彰子は、女性としての幸福を極めるあまり、命ははかなくて、その短命を何代もの天皇が悲しんだから。

b　彰子は、幸いを極めるあまり寿命が長くなく、何代もの天皇の行く末を見届けられずに、亡くなってしまったから。

c　彰子は、幸いを極めるあまり、夫まで長寿であったために、二人で後の何代もの天皇を見送らなければならなかったから。

d　彰子は、何事にもこの上ない幸いを持っていたあまりに、寿命まで長く、そのため何代もの天皇に先立たれてしまったから。

問八　波線部X「皇后宮」、Y「上東門院」について、本文中ではこの二人をどのように評価しているか。次の中から適切なものを、X、Yそれぞれにつき二つずつ選べ。

a　天皇が亡くなるたびに、とても心打たれるような和歌を詠むなど、和歌の才能が抜きん出ていた。

b　亡くなった後も一条天皇に深い悲しみを抱かせるなど、一条天皇にこの上もなく深く愛された。

c　すばらしい人の例として、真っ先に挙げられる人で、すばらしいかどうかは議論するまでもない。

d　逆境にもめげず、常に情趣あるさまを保ち、風流を好み気高く生きた。

e　多くのすぐれた女房がお仕えしているのに、衣装や催し事など様々について、華美にはせず慎み深くあろうとした。

f　他の后たちに負けず、自ら様々に趣向を凝らし、仕えている女房達にも気を配って一条天皇の時代をもり立てた。

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。なお、設問の関係上、返り点・送り仮名を省いたところがある。

聊斎志異、用筆精簡、寓意処全無迹相。蓋脱胎於諸子、非僅抗手於左史・龍門也。[1] 相伝、先生居郷里、落拓無偶、[2] 性尤怪僻。為村中童子師、食貧自給、[3] 不求於人。作此書時、毎臨晨、携一大磁甕、中貯苦茗、具淡巴菇一包、置行人大道旁。下陳芦襯、坐於上、[4] 煙茗置身畔。見行道者過、必強執与語、捜奇説異。[5] 随人所知、渇則飲以茗、或奉以煙、[6] 必令暢談乃已。偶聞一事、帰而粉飾之。[7] 如是二十余寒暑、此書方告蔵。故筆法超絶。王阮亭聞其名、特訪之。[8] 避不見、三訪皆然。先生嘗曰、此人雖風雅、終有貴家気。田夫不慣作縁也。其高致如此。

（鄒弢『三借廬筆談』）

〈注〉○脱胎…ほかの作品を上手く利用して、自己の作品に生まれ変わらせる。　○左史・龍門…左史は左丘明。龍門は司馬遷。どちらも歴史家として著名。　○落拓…落ちぶれる。　○磁甕…磁器製のかめ。　○苦茗…にがい茶。　○淡巴菇…タバコ。　○芦襯…芦で編んだ薄べり。　○告蔵…完成する。　○王阮亭…清の文人、王士禎（一六三四～一七一一）。

問一　傍線部1「非僅抗手於左史・龍門也」の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　やっと左史や龍門と並び立つほどだ。

b　単に左史や龍門と肩を並べるどころではない。

c　わずかに左史や龍門に遅れをとるだけだ。

d　ただ左史や龍門に及ばぬばかりだ。

問二　傍線部2「無偶」、3「自給」、7「粉飾」の意味として、もっとも適切なものを、それぞれ次の中から一つ選べ。

2
a　妻子もなく
b　はなはだしく
c　孤独であり
d　住居もなく

3
a　食べ物を人からもらって
b　自分から給料を得て
c　自分の物を人に与えて
d　みずから生活を立て

7
a　きれいに作り変える
b　外面を飾り立てる
c　ご褒美をあげる
d　人の目をごまかす

問三　傍線部4「煙茗置身畔」について、そうした理由について述べたものとして、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　タバコやお茶で気分をゆったりさせるため。
b　タバコやお茶が身近なものであることを示すため。
c　タバコやお茶で旅人をもてなすため。
d　タバコやお茶を販売して金をもうけるため。

問四　傍線部5「随人所知」の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　人の知識にうまく反応する。
b　人に話を合わせて聞き出す。
c　人の知るままに話をさせる。
d　人の判断にまかせる。

問五　傍線部6「必令暢談乃已」の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　かならず話すことを命じて、楽しまなければすまなかった。
b　いつも思うがままに話をさせ、そこでやっと聞きやめた。
c　たとえ話をゆっくりしても、終わりはかならず来るものだ。
d　のびやかな対話をたのしんで、それでよしとした。

問六　傍線部8「避不見、三訪皆然」について、そうした理由について述べたものとして、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　王阮亭は文雅な人ではあっても家柄を誇るところがあり、自分のような野人とは合わないと思ったから。

b　王阮亭は風雅を愛する高貴な人であるので、田舎びた自分が面会することがためらわれたから。

c　王阮亭は身分の高い知識人であり自尊心が強いので、自分のような貧乏人を嫌うだろうと考えたから。

d　王阮亭は風流な貴族ではあるが真に文学を知る者ではないので、自分の作品の荒削りな良さを理解できないと思ったから。

問七　文中の「先生」の姓名として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　白行簡

b　羅貫中

c　蒲松齢

d　陶淵明